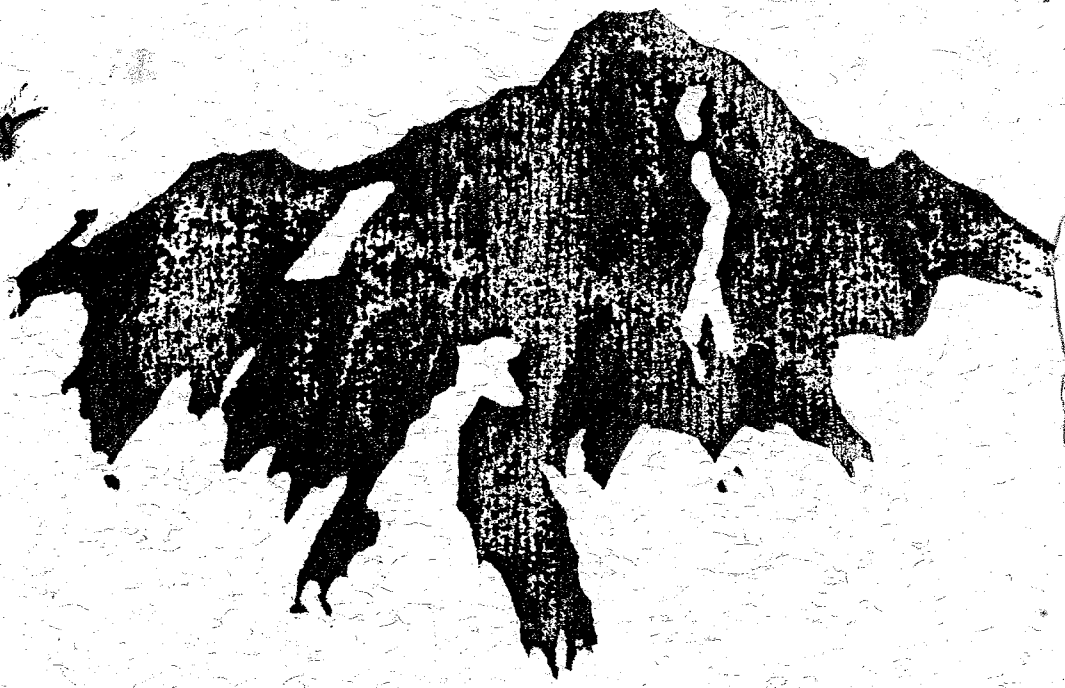
彷徨



17

都立西高ワンダーフォーゲル部

目次

巻頭言　伊藤義和　一

公式山行

四月　二

五月　二

六月　三

夏山合宿記録

男子　八

女子　八

一年生感想文

ワンゲルに入って　一四

雑感　三枝みのり　一九

ワンダーフォーゲルに入部して　八島久男　二一

ワンゲル部について　羽柴春実　二二

菊池治男　二三

O.B通信

西高山岳部の生い立ち
四捨して五年前西校(高ではない)に
いた男の思い出　笠林　武志　二三

あのころ　第九期　二三

無題　松田　稔　二四

個人山行レポート　第十三期　川田秀明　二六

南アルプス奥秩父主脈縦走　野呂和雄　二七

下思議な山のカ　尾崎純理　二八

鳳凰三山春山合宿　伊藤義和　三〇

(後輩諸君に)スキー合宿　平野誠　三二

山行総覧　吉田横次郎　三三

野呂和興　三五

三七

三八

巻頭言

伊藤義和

西高山岳部が創立して今年は早くも二〇年目。当時は西高も現在の名ではなく府立十中と言われた時代。終戦直後で何もない時代。そんな時に今のような素晴しい登山用品があるはずもない。そんな社会状勢の下で私達の先輩はこの部を産んでくださった訳である。私達には想像もつかない苦労もあったに違いない。しかしそんな下にあってもこのクラブはどんどん発展し続けた。器具も次第に整い二七年頃からはスキー合宿、また春山合宿も行なわれるようになった。この頃より我々山岳部の技術は顧問の先生方の力をオーバーしていった。そして学校側の圧迫も増していった。三六年のことであったか……。西高から山岳部という名前が消えてしまったのである。その代りとして現在のワンダーフォーゲル部が生まれた訳である。これ以来、以前の山岳部時代の実力は確かに落ちてしまった。しかし、私達は、私達の先輩が築き上げてくれたスポーツアルピニズム精神を決して忘れていなかった。二〇年前の人達の心は現在の部員にも通じているのである。現在の私達は、昔の人の精神を受け継ぎ、それに加え現在の新しい考えを折り込んで新しい時代の山岳部を築きつつあるのである。私達の部の活動が一般的に言われているワンダーフォーゲル活動と異なっているのもここにある。もちろん私達はこの部を他の者に近より難い山岳部に育てていこうなどという考えはもちろんない。あくまでも高校生としてふさわしい部に育てていこうと思う。この二〇周年を機会に我々はこれからの新しい発展の基礎を作りこれからの活動を充実させていきたいと考えている。

公式山行記録

4月[illegible]

新入生歓迎会

四月十七日（土）

川苔橋でバスを降りて、谷沿いの林道を登る。ひんやりした外気に若葉の匂いを感じて歩いていく。先発隊は、明日の新人歓迎会の為に、途中例の紙をはる。

「へへへ……。」

夜弓削さんが来て下さった。

四月十八日（日）

四時起床。外へ出る。四月の山は、朝はさすがに寒く身を刺すようだ。

「そうだ、天気は？」

やはり、厚い黒い雲が天をおおい、今にも降りそうだ。

彼の"雨男君"に今日もやられる。

まき集め、朝飯、そして昼飯のしたく。

どんどん時がたっていった。

そのうち、どうやら天気も持ち直し、カレーのニオイが、あたりに漂い、用意が整うと百尋の滝まで迎えに行った。

十二時、塩地谷小屋着。

さっそく昼飯。みなの顔もほころぶ。嬉しい時が経過した。昼飯も終り、例のごとく合唱。自己紹介。どの顔も嬉しさでいっぱい。

二時、小屋を出る。

思えば、あれから一年。僕達もこの同じ道を登った。あの時は苦しかった。でも歩くのがいやだった。

今年の一年は……。

三時頂上。

頂上付近では、霧雨。早くも一年生は、『読図ができない。』との事で"雨男君"を非難。この若さに押されながらも、当人がぼやく事には、『今年は、お前を雨男にしてやる。』

頂上で写真を撮った。

三時半頂上出発。

掛け声と規則的な靴の音。そして霧。幻想的な気分になった。

『一年生は喜んだかなァ。この山行で、何を学んだだろう。長等もいつかは……。』

いつしか夢心地になり、ただ、足だけが動いている事が、わかるだけだった。

素朴な奥多摩の山に、大自然に、抱いこまれていた。赤ん坊の頃を思い出してい

たのかもしれない。霧に包まれた自分しかいないようだ。『ファイト。』はっとした。下には鳩の巣のん家が見えていた。五時半だった。

5月 三頭山

☆男子

五月八日（土）

二時すぎに全員立川駅に集合した。一年生のパックを直したり、重量の調節をして、五日市行の電車に乗った。学生で混雑してほとんど座れなかった。五日市駅で五十分待ち、数馬行のバスに乗った。途中本宿で乗り換え、人里で降りた。すぐ体操をし、バス道路を歩きながら川原に幕営地を捜した。三十分ほど歩いてO.Bや二、三年生に幕営地を捜してもらって、笛吹峠への分岐から少し数馬よりの川原に決めた。少し傾斜していたがテント四張を張った。川原にかまどを作り薪で御飯をたき、カレーを作った。七時に出来上がり、川原で楽しく食べ、八時半に寝た。

五月九日（日）

三時四〇分起床。まだ薄暗い中をすぐ食事の用意をする。弁に出しておいた肉が犬に喰われていた。六時出発。先頭は平野君であり、みんな快調だ。昨日の道を少しもどって、笛吹峠への道を登った。農家のわきを通りすぐ屋根にとついた。ニピッチ目笛吹峠で道を間違え、尾根道に行かず広い下る道にいってしまった。すぐ気が付いて尾根道に直登した。一年は直登で大分まいったようだったので、尾根道に出て少し休みにした。笹尾根という名のとおり笹が沢山はえていた。天気は良く、相当暑くなった。三頭山めがけてゆるやかな登りをどんどん行った。近いようだが、次から次へと小さなピークが現れて来るのでまったくいやになる。三頭山に近付くにつれ、登りも大分急になり登相当バテてきた。ついに一人が座り込んでしまった。OBと三年生に元気付けられながら、遅れて歩いたり、座ったりしながらついてきた。三頭山の最後の急登を登り切り十時過ぎ中央峰に出た。予定より二時間早かった。富士山がかすかに見えていた。昼食のパンを食べ、紅茶をわかしながら、女子隊の来るのを待った。途中通った避難小屋までボックをくみに行かしたが水量はあまりなかったらしい。頂上付近は水も木がなく、大変暑かった。一時過、女子隊が来た。皆元気がいい。

紅葉を飲み記念写真を撮って出発した。東峰との鞍部から屋根をおりた。途中に急な所が二ヶ所あったが無事ころばずに通り、イヨ山を通って奥多摩湖まで一気に調子よく下った。奥多摩湖は水が少なくて浮橋がなかったので下って上って大変だった。小河内神社前からバスに乗り氷川へ行った。

〔コースタイム〕

期日	大沢頭	10:00	1日目
	三頭山	10:35	立川 14:00
		14:00	14:45
五月八日～九日	小河内神社	16:20	五日市 15:15
	氷川	16:45	16:05
		17:18	17:00
	立川	18:30	人幕 星竜地 18:00
			2日目
			起床 3:40
			発 6:00
			笛吹峠 7:20

参加者　伊藤　山野　平野　岡田　仙波　八島　赤松　前田　中尾　永井　山本　菊地　上遠野　石橋　西尾　内山　中村　青木　古賀　早瀬　金森　土方　吉田　河野　平木　秋山

女子

五月山行はテント数が足りないこと、川乗山日帰りの経験だけで女子の泊りは無理ではないか等の理由で三頭山日帰り、山頂で男子と一隊になるということになった。

午前六時三〇分立川集合、滝口さん、佐藤さん、栗田先生が来ていなかったので氷川で福田さんに待っていてもらった。小河内神社前で出発した時、奥多摩湖は濁水でトラム鐘の橋が浮かず木製の橋となっていた。橋を渡り湖畔の道を左へ、途中道は二下に別れていて下側を行く。下側の道は最近あまり歩かれていないらしく、草木や土の崩れ易い所があり、時間がかかった。幽沢川に入り一〇メートル位行った所で川を渡り休む。日指に出る道がはっきりしないので二年一人見に行く。上の道を行けば日指の分岐に出るはずだった。滝口さん追いつく。二ピッチ目、日指まで自動車道を行く。細い道に入ってから井口さんが気持を悪くし、薬を飲み出発。川を渡り少し行った所で休む。松枝さんがマメを作りバンソウコウをはった。井口さんの様態が思わしくないので荷物を二年で分けた。福田さん、佐藤さん追いつく。三ピッチ目、しばらく行くと道が二分しており、鞘口峠下への道を行く。鞘口峠下林小屋を過ぎるあたりで井口さ

ん家へ帰ることになり滝口さんが送って行った。小屋を過ぎ樹林帯の中を声を掛け合いながら進む。谷状の所でかなり急な登りが続く。一一時一〇分朝日峠に着く。天気は運よく晴れていて、南側敷馬の方が見渡せた。滝口さんは三ピッチ目の間で戻ってきていた。峠で昼食、皆あまり食べず、食パン、乾パンが余ってしまった。一一時五〇分峠発、階段状の急な道を登りきりしばらく行くと森林へ入る。皆すごく快調。東峰と南側にまく暗い道を行く。中央峰へ行く道は木の根。子等ではっきりしない。男子が待っているとずの中央峰へ声を掛けながら登った。頂上に着いた。男子はいなかった。女子の方が先に着いた！皆で三角点を踏む。中央峰は森林の中にあって見晴らしが悪い。その時西峰に奇声があがった。男子は先に西峰に着いていたのだった。ただちに紅葉の待った西峰へ少し下り最後の急な登りをファイトを連呼しながら登った。西峰山頂一三時。南側に富士山がうかんで見えていた。後男子と一緒になる。

【コースタイム】

滝口		6:30
立川		8:02
		8:05
滝口	小河内	8:40
		8:55
日原		10:00
朝日峠		11:20
		12:05
		13:05
三頭山		14:00
		16:00
小河内		16:20
		16:45
氷川		17:18
立川		18:30

五月九日

参加者　星野　丸島　三枝　中井　松枝　羽柴

稲葉　辻　井口　高木
佐久間　滝口　福田（OB）
佐藤（OG）

6月　雲取山

人数がなにしろ四〇人を越えたため、氷川で臨時のバスを出してもらって日原へ。

予定より少し早く着いて中日原下車。そこで女子と別れる。女子はそのままバスで鍾乳洞へ。体操をすませ、ザックを背負い、一度日原川の河原へ出て、そこからいよいよ登りにかかる。空は雨男のためか曇って情けない有様であるが、一年生の顔はファイトに満ちていた。稲村尾根に取り付く頃から一年の顔に汗がにじんでくる。一年、二年の間からそれぞれファイトがかかる。川苔山、本仁田山な

ど背にして、単調な登りを続ける。そのうち雨が降ってくる。予定より五〇分位早くヒルメシダイに着いて、そこで晩飯。疲れた後の飯はうまい。一年の顔を見ていると、「まだまだ歩けますよ。」と言っている様だ。しかし飯を食っている間に雨足は強くなってきた。残念にも昔ポンチョを着ろ。飯を食い終わり出発準備、あと三五分で鷹ノ巣小屋である。ところが、この頃から皆の足が鈍ってきた。フラフイトをどんどんかけているのだが、全くだらしない。鷹ノ巣がすぐ近くに暗闇の中でポッカリと見えているのに、時間は経ってしまった。数人の者が疲労が全体にこんなにも影響を及ぼすのかと考えさせられる。鷹ノ巣は通過して避難小屋の幕営地まで一気に下った。三年生が先に下った。

て懐中の光で一年生を励ましてくれた。雨の中でも幕営は動作が鈍ってはならない。二年が、気の毒ではあるが一年にとなってどんどん幕営をさせる。しかし多少動作が遅いようである。二五分もかかっている。テントを張り終るとさすが一年もはじめみんなホッとした様。各テント、個人プレーを行う。十時一五分就寝。どうもいつまでもねがうるさいようであった。

四時ジャスト起床。昨日の飯の用意が遅かった。急いで飯を食べてから出発の準備。まだ見ていると積極的に仕事をしなかったり無駄な動作が多い様であった。結局、体操を終えて出発したのが六時四〇分。四〇分遅れたわけである。予定の時間も確かに忘かったが、やはり行動が鈍かったのは否定できない。というわけで、最初はコースが真平なのでどんどん飛ばし最初から五の分のピッチ。七ツ石の手前の分岐で休み。ピッチは最高潮だが、雨はひっきりなし。予定の富田新道が出来るかどうか非常に危ぶまれる。ブナ坂、興多摩小屋と順調に飛ばした。飛ばしたため少し苦しそうな者もいたが特に不調な者もいなかった。それに興多摩小屋を過ぎるあたりでは殆んど雨もなかった。富田新道との分岐でザックをおろし、二年のザックに水筒と昼食を入れて雲取山頂へ。すぐそこが頂上だという時になって雨がまた激しくなり出した。全員雨男Yの方を見た。ところがあまりYには反省の色が見えない。頂上の小屋で昼飯。一年生は二〇〇〇M級の山に初めてという者が多かった。全員ソーダ水で乾パンを食べる。一年

昼には三年の野平さんなどから、カルピスなどのプレゼントがあり、二年生はそれを指をくわえてただウンパンを食べるという全く二年がのけ者にされた昼食。予定より一五分早く出発。ところがまだ非常に雨が降っているので富田新道をあきらめ鴨沢を下ることにした。西尾の靴ずれの治療をすませブナ坂に出たのが一時二三分。最初は何かロープスだったが、じきにピッチは速くなった。それにホ袖を過ぎる頃には、雨も上がり薄日がさしてきた。途中足の痛みの激しい西尾を隊からはずして鴨沢に着いたのが一二時五三分。一時間半で鴨沢を下ったのである。一年のメンバー、八島、山本、中村、吉賀、永井、浮山、赤松、石持、中尾、前田、上遠野、早瀬、青木、菊池、皆よく頑張った。

指手で迎えたい気持ちだった。すぐ氷川行きのバスに乗車。氷川では思いがけなく女子と会った。(本来の予定では男子は富田新道を下り、女子は鷲ノ巣、七ッ石なのだが、双方雨で予定を変更したため、こういう結果になった。(伊藤記)

〔コースタイム〕

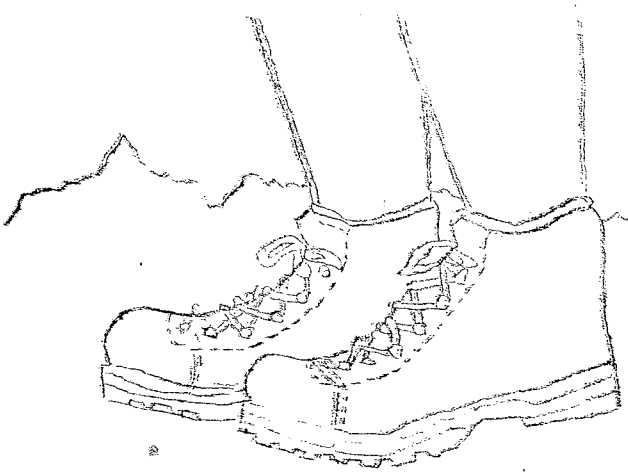
就寝	22:10	立川	13:45
			14:12
起床	4:00	氷川	15:30
発	6:40		15:40
七ッ石山	7:58	日原	16:15
	8:04		16:25
ブナ坂	8:13	鷲ノ巣	18:53
奥多摩湖	8:34		19:30
富田新道分岐	8:53	鷲ノ巣	20:35
雲取山	9:18	営業地	20:57
	10:20	幕	21:18

期日　六月一二日～一三日

参加者　伊藤、山崎、山野、平野、八島、岡田、赤松、仙波、前田、小川、中尾、永井、石持、山本、西尾、菊池、上遠野、吉賀、内山、早瀬、中村、青木

富田新道分岐	10:30
	10:40
ブナ坂	11:06
	11:23
鴨沢	12:53
	13:15
氷川	13:55
	14:15
立川	15:23
	15:30

夏山合宿



高馬　穂・槍・白　子子　男女

雨はもうたくさん！

……男子

○期日　七月二一日～二八日
○参加者　野嶋（CL）　尾崎　佐藤　伊藤（SL）　山崎　山野　平野　岡田　八島　赤松（内山）　石榑　中村　永井　西尾　小川先生（OB）
計一六名

本年の夏山合宿計画は、五月頃よりコースの選定が始まり、まず四つの候補があがった。それは㈠針の木峠越え→立山・剣、㈡薬師岳→立山・剣、㈢笠ヶ岳→槍、㈣裏銀座縦走。これらを準部員間で研究、討議した結果、㈣が一番良いように思われた。今年は大分雪渓が残っており、水の心配があまりなく、また去年やる予定でなった所で、天候のためとりやめになった。我々がやるにしても適していると思うだった。決定されて我々の準備も急ピッチで進められた。もこわが出発三日前になって、豪雨の為、大糸線不通、道路各所で寸断。このニュースは、予想だにしなかった最悪の事態である。ここで急拠、新たなコースを選定しなければならなくなった。ここで焦点のあたったのが㈢であった。OB・三年生達の適切な助言をうけ、二年同志でも討議を繰り返した

結果、最終的にここに決定した。しかし食料計画、その他も、さしたる影響を受けず、ついに二〇日にパック完了！。準備万端整い、夏山合宿の開始となったのである。

七月二一日

今年は朝立ちである。合宿不参加の二年一年数名が、座席を確保してくれた為、全員座れ、快適にスタートした。どんよりとした曇りの重苦しい日だったが、我々の心はよいよ始まった合宿への期待でふくらみ、全員元気そのもの。交通機関の連絡もうまくいき、予定通りに上高地小梨平に着き幕営する。しかし島々駅に着く頃から本格的に雨が降り出してしまった。

七月二二日

朝から曇りのうっとうしい天気であった。しかし我々は皆ファイト満々。本日の目的地である槍見温泉にむかう。最初で荷が重い。つ畜生、雨でテントが重くなりやがった。こうばや く声も聞こえた。道はそんなに急でもない。焼岳の落岩のあとがすさまじい。最後にちょっと急登し ひょこっと甲尾峠に出る。ここで、きし入れのスイカ二個にかぶりついた。うまい。何とも言えぬ味だ。おりから降って来た雨の中を予定より早く出る。下りは登りよりもいやだ。荷が容赦なく肩に食

皆足下をみつめておりた。河原の幕営地が川の増水の為使用不可、やっとのことで温泉の道の奥にはいらしていただいた。

七月二三日

本日は朝から雨。沈滞ムードっやで、しばらく様子をみたが、雨衰えず、停滞を決定。下の川は一夜にして中ノ島をのみ、しさおり岩を押し流すドドドという音がうつろに響く。九時頃、中日ロッジに天気図を書きに行く。全く悪い。低気圧がずっと続いている。昼から尾崎さん、佐藤さん、伊藤の三人で、クりや谷を偵察に行く。しかし、そのうち雨も霧雨となり川も減水しだした。雨男という いやな名をつけられている僕は この日終始、非難をおびた目で見られ テントの隅にひっこんでいなければならなかった。次の日の予定をかえて、雨でもワサビ平に行くことに決定。テンデンした一日は終わり、明日への希望を抱いて眠りについた。

七月二四日

今日も雨である。がテントをたたみワサビ平へ向かう。水にひたった、平な道を速いペースで進む。途中雨があがるがまだ曇り。しかし ワサビ平に着く頃 ついに待望のオテントさんをおがむ。ワッと歓声があがる。お心込む。展望はまるでないので つめておりた。河原の幕営地が川の増水の為使用不可、やっとのことで温泉の道の奥にはいらしていただいた。

七月二三日

本日は朝から雨。沈滞ムードっやで、しばらく様子をみたが、雨衰えず、停滞を決定。下の川は一夜にして中ノ島をのみ、しさおり岩を押し流すドドドという音がうつろに響く。九時頃、中日ロッジに天気図を書きに行く。全く悪い。低気圧がずっと続いている。昼から尾崎さん、佐藤さん、伊藤の三人で、クりや谷を偵察に行く。しかし、そのうち雨も霧雨となり川も減水しだした。雨男という いやな名をつけられている僕は この日終始、非難をおびた目で見られ テントの隅にひっこんでいなければならなかった。次の日の予定をかえて、雨でもワサビ平に行くことに決定。テンデンした一日は終わり、明日への希望を抱いて眠りについた。

七月二四日

今日も雨である。がテントをたたみワサビ平へ向かう。水にひたった、平な道を速いペースで進む。途中雨があがるがまだ曇り。しかし ワサビ平に着く頃 ついに待望のオテントさんをおがむ。ワッと歓声があがる。お

日様がこんなに有難く見えることはなかった。昼食後少し上の雪渓に遊びに行った。この間、先生と三年生が上まで偵察に行き中帰る。道は安全。明日は大丈夫とのこと。夕食準備今日は全くゆったりとした一日だった。

七月二五日

今日は朝からバッチリ晴れ。小老沢道を快調にスタートした。ベトコンの活躍しそうな湿地帯を過ぎ、川に沿って進む。川を離れると低地帯があり、すぐそこも抜け雪渓がそこにかしこにある開けたガレ場に出る。この上が乗越だ。最後のピッチで一年二人がバテてしまい、二年、野嵜さん、小川先生がつき、激励しながら急なガレ場を登るのがその辛いこと。つくづく苦しい。しかし、よく頑張り、一〇時五分乗越に乗り上げた。乗越の上の雪渓でシャーベットに皆のどをうるおした。この日快晴、空は真青に晴れわたり、全く夏山らしい天気だ。また ここで寝ころんで見る槍、高の稜線の素晴しさはとても書きつくせない。まあ行ってみてください。一年も初めて見る壮大な連稜に今までの疲れも吹きとび、夏山の味を充分かみしめていたようだった。

この展望を満喫し、太陽を心ゆくまで浴びてから、今日の幕営地双六池に向かった。双六は今までの悪天候のためかテントは一張りもなく、ひっそりとしている。去年の設営地の近くにテントを張り、濡れ物を乾かした。久し振りの好天に僕はようやく大きな顔をすることができた。この日は明日の槍登頂へのアイトを秘め、槍からの展望を期待しながらもも布にもぐった。

七月二六日

本日が合宿の山場だ。ラーメンを食べて四時に出発した。暗いうちの歩行は気持ち良い。樅沢をこしてあっと後 日の出を仰ぐ。お日の出のすがすがしいこと。澄みきった大気の中 青くけぶる稜線の間をぬってどんどん進む。我々は 去年も通った道だ。去年は新人として、感慨無量だ。今年は準部員として通るこの道は千丈沢乗越で槍ま快適に尾根道をとばし、「とうふざけた道標を見にて二・三〇分。」

後。最後の槍への苦しい登りが始まった。一歩一歩着実に歩を進め、すぐ上にある肩に向かう。一年、よく頑張って無事肩到着、槍の穂先がここから天空にそびえ立っている。肩で昼食をとった後 頂上に登る。よがりつ にも一応岩登りである。ウォー、一年が歓喜の声を上げる。全く三六〇度の展望、さえぎるもののあろうはずはない。三一七九・八米

の北ア第二の高峰の頂上である。穂高へ続く稜線。常念山脈、そのむこうにかすかに見える南ア・八ヶ岳・三つの鎌尾根・三連・ワシバ・薬師、果ては遠く日本海まで三年生には見えたそうだ。頂上では今合宿、最初のビールを祝いカンズメで乾杯して肩におりた。槍沢のいやな下りをどんどん下り二時三の分頃横尾に着いた。

七月二七日

本日は奥穂を空身で往復だ。横尾上空は晴れていたが穂高は雲の上だ。屏風の断崖をまわって涸沢に至る。奥穂山荘に向かう。かなり急な登りだがなにしろ空身だ。途中山荘の鐘の澄んだ音色がかすかに聞こえてくる。山荘に到着。全くガスっており、雨さえ降りだした。皆一斉に僕の方を向く。僕はポンチョを着こんでしらばっくれていた。

昼食後頂上に登ったがガスのため視界五米。三八〇〇米の高度感が味わえない。まま下った所。全く残念至極。山荘から三分の一程下った所で四峰が見えた。そこは我々の良き先輩で、新入生歓迎会のときもお見えになった早大山岳部の弓削さんが今年の五月、連休に遭難し亡くなった所だ。我々はここで黙禱を捧げ、ケルンを積み唄を歌い、弓削さんの冥福を祈った。

この日は明日の下山をひかえ、めいめい、思い思いの若えを胸に抱いて眠りについた。遠くで雷が鳴っていたが明日は大丈夫だろう。

七月二八日

とうとう合宿最後の日が来てしまった。前半はさえない日の連続だったが、後半になり一応槍・穂高とやることができた。途中、苦しいことや、楽しいことがたくさんあったこの合宿も、いよいよ最後の日が来ると名残り惜しくなる。

今日は徳本峠をこえる。この道はバスが入らない以前は上高地へ入る唯一の道で、名だたる多くの先輩達の通ったところだ。この歴史的価値ある道を通り、登山のはしくれとして、先輩の足跡をたどるのはうれしいことだ。平らな道なのでどんどんとばし、いよいよ徳本の登りに入った。林の中を一時間ぐらいぜいぜいと登り続け、左にまわってひょいと峠に出る。いわゆるひなびた峠の茶屋がそこにあった。穂高の壮大な景色は残念ながら雲のために見られなかった。

幾重にも曲がった道をずんずんとばして下ると岩魚留の小屋に出た。ここで昼、小川先生が皆に岩魚をごちそうしてくれた。そのうまいこと。この味は一生忘れられまい。このあとは長い長いだらだらと続く道だ。しか

し皆元気で、ようやく一二時五八分、出口に出た。バス通りに出て歩いた。ともかくも無事に合宿はほぼ終わったわけである。我々はお互いの健闘をたたえ、祝福しあった。下りてから思い起こすと、全く感無量である。これらは皆がこれから成長していくうえに重要な位置を占め、いつか立派な実をつけることができると思う。松本で準急白樺に乗り、九時五四分東京に着いた。

（山崎記）

奥穂山荘	9:25	25日		21日							
	10:05	発	5:15	新宿	7:00	コ					
奥穂頂上	10:35	大ノ乗越	10:05	松本	11:55	ー					
	11:35		12:00		12:21	ス					
涸沢	13:11	双六	13:18	島々	12:54	タ					
新宮	15:20	26日			13:44	イ					
28日		発	4:00	上高地	16:12	ム					
発	4:54	槍ノ肩	8:30		16:18						
徳沢	5:44		9:08	小梨平	16:42						
白沢土	6:24	槍山頂	9:35	22日							
徳本峠	7:54		10:05	発	5:15						
	8:14	槍ノ肩	10:35	槍見	12:23						
岩魚留小屋	9:16		10:50	幕営	13:20						
	10:19	槍沢山ヤ	12:46	23日							
島々	13:28	一ノ俣	13:26	停滞							
	13:53	横尾	14:34	24日							
松本	14:26	幕営	14:48	発	6:25						
	15:55	27日		穂高温泉	7:05						
新宿	21:48	発	6:00	ワサビ平	8:45						
解散	21:54	涸沢	8:00	幕営	9:00						

夏山食料計画

	朝	昼	晩
21日→上高地		弁当	飯 煮物 たくあん 茶
22日→徳沢	雑煮 茶	食パン・レモン ピーナッツクリーム ジュース	飯 ブタ汁 茶
23日→笠岳	飯 コンソメスープ 茶	フランスパン・ジュース イチゴジャム・落花生 キュウリ・味噌	飯 カレーライス 茶
24日→双六	飯 味噌汁 茶	フランスパン・ジュース イチゴジャム・甘納豆 キュウリ・味噌	飯 シチュー 茶
25日→横尾	ラーメン 茶	カンパン・レモン チョコレート ジュース・レーズン	飯 コーンスープ 茶
26日→穂高	飯 コンソメスープ 茶	カンパン・ジュース イチゴジャム アメ・チーズ	飯 マッシュルームスープ 茶
27日→松本	飯 味噌汁 茶	カンパン ピーナッツクリーム ジュース・レーズン	自由
停滞	カンパン イチゴジャム コンソメスープ 茶	カンパン ピーナッツクリーム ポタージュスープ 茶	おじや 茶

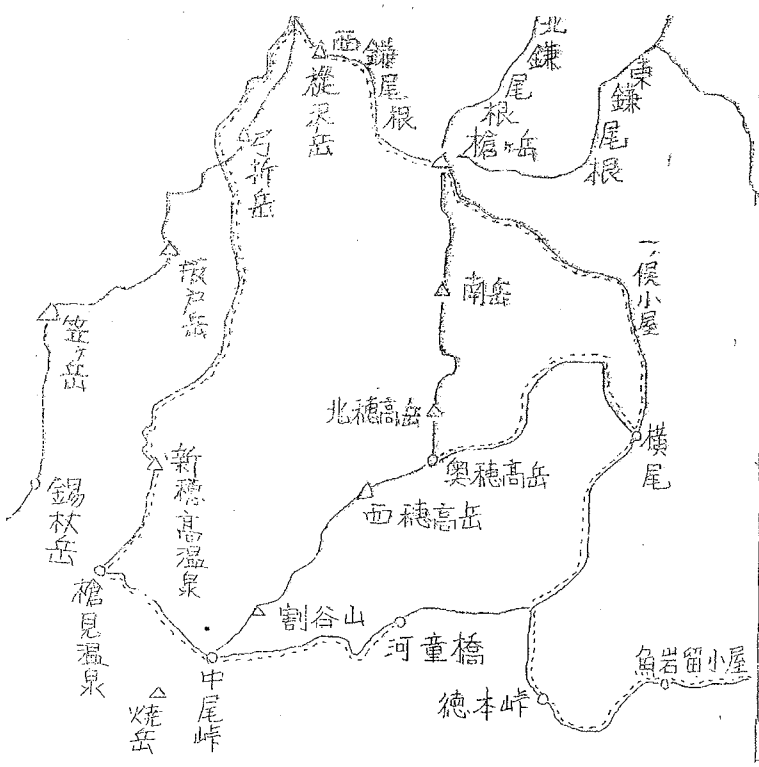
○夏山器具一覧表

幕営用器具

テントNO14	一式	一一・五kg	
同NO15	一式	九・九	
同NO17	一式	一〇・一	三三・五kg
張綱予備	四本		
ツエルト	一体	三・〇	
スコップ	一本		
ナタ	一本	〇・五	一八
ラジウス（大）	五台	一・三	
台皿	五枚	一一・二	
メタ	一缶	一〇・〇	
石油	八・五ℓ	二〇・〇	
石油用ポリタン	一〇個		三二・二
石油用ポンプ	一本		
ローソク	一二本		
針金スペア	二束		
携帯ラジオ	一台		
天気図			
目覚し時計	一台		

炊事用器具

食器	四〇個	一・六	
鉈	三丁	〇・五	
しゃもじ	二本	〇・五	
おたま	二本	〇・五	
キジペーパー	七本		



タワシ	四個		
布パケツ	一個	一・〇Kg	
飯ナベ	二個	〇・七	
ナベブタ	六枚		
洗いナベ	四個	二・〇	
プリトスマンド			六八Kg

すてきな合宿

……女子

・期日　八月二日〜八日
・参加者　滝口(C.L)　三浦　吉田　高木(
井口　佐久間　西村　稲葉　岩井
島(S.L)　三枝、中井　羽柴　星野・小川先生(OB大)
加藤先生　平沢(OB)

まずこの合宿に行うに当って、一番気になったことは、一年の体力の事である。六月の山行で雨にやられ、結局、合宿で初めて荷物を背負うことになった。ここに不安があり、皆目見当がつかなかった。初めは、実力から見て定着のコースを選んだが、良い所が見付からず、三年生の勧めもあり、白馬周辺に決った。ところが、ここは定着コースが取りにくく、最初の計画は、大池ー白馬ー雪倉ー朝日ー蓮華だった。一応決めたが、OBから無理だと声がかかり、七月中旬にコース変更。日数を一日ふやし、定着を加えてかなり楽な[illegible]日数が長いこと。六泊であり学校側から注意を受け、三年にも無理だという声もあった。父兄の反応も心配だったが、よく理解していただき、問題にならなかった。

結局、楽な日程なので大丈夫という判断でこれを最終決定とした。荷物の重さは、一年二〇Kg二年二五Kg以内で準備に入った。OBは大先輩の平沢さんが来てくださるので心強い。私達が特に留意したのは家庭との連絡で、父兄会を開き、合宿内容について理解を深めていただいた。

八月二日、三日。　新宿ー栂池

出発二三・〇〇。一年の男子に並んでおいてもらった為楽に座れた。列車も比較的すいていた。夜行にしては、快適で、三年生、OBが少々うるさかったが、皆よく眠った。信濃四谷で降りバスに乗車。車が途中でエンコし、一同降りて川から水を運ぶ。四〇分遅れて赤抜へ着いた。朝食をとりいよいよ出発だ。一年二〇Kg二年二八Kgの荷物を背負う。一ピッチ目相当調子が良い。まだ荷物の重さがピンとこない。でも三〇分歩くのはきつかった。赤抜の頭で一〇分休む。四〇分ピッチを三〇分ピッチにかえる。細く長くの精神だ。時折、三年、OBから声がかかる。一年もよく応える。エさんが少し遅れ、ペースが落ちる。ゆっくり間をあけずに歩く。全く暑い。汗がぽたぽた落ちる。なかなか高度が稼げない。森林帯の登りは苦しいばかりだ。流石に二八Kgはこたえる。腰にずしりとくる。四ピッチ

目、平坦地で昼食。余りにゆっくりなので、
柵池までは危しくなってきた。一応目的地を
神の田園に換える。時すでに十二時。午後も
大してペースは変らない。ゆっくり進む。一
年は黙々と歩く。やがてひょっこり神の田園
に出た。期待の水場はなかった。幕営はできな
い。前進あるのみ。頑張って柵池まで行く
ことにする。一年にフィットをかけて進む。
後で聞くとこの時一年生は二年が怠らしかった
そうだ。この後割に快調で、一ピッチで城
大小屋、そしてすぐに柵池だった。よく頑
張ったと思う。カレーライスに冷した西瓜を
食べ、寝た。

八月四日　柵池――白馬大池

前日、柵池まで入ったので、この日は大変
楽になった。予定通り朝食をとり、きちんと
出発できた。出だし好調。どんどん高度を稼
ぐ。この調子なら天狗原はすぐだ、と期待し
たが意外にしつこかった。少し登るとゆるや
かになり、また登るといった調子。ニピッチで
変化があり、退屈しなかった。でも展望が開け、地形も
ずまずである。いよいよ柔弱の登りにかかった
。岩を一歩一歩登る。慎重に。緊張のせい
か疲れを感じない。大きな岩場で昼食。昨日
のカンパンはしけっていてまずかった。今
日はおいしい。食べているうちに深くウリ平
をひきあげる。少しの登りで系路山に出
松で一休憩。ずっと平で三角点がかすかに
ねのごろごろした道を下り、ガスにつ
早かったので、夕食後各自、昼寝をするこ
んだ。高山植物が咲き乱れていて、一生懸命
覚えた。雪渓の白と草の緑、花がビンタに黄
色、そして空の青、老の青紫。

八月五日　白馬大池――三国境

今日は距離は、長いが、登路がきつい
日である。朝、昨日と同様ずっとつづく
が悪い。白池の入れすぎとつづく。
燒ノベもまずかった。でも涼しい。
は出発まで。後は最高である。出発のしかた
快晴。小蓮華へ行く途中、可愛らしい高山植物
雪渓に会い、雪合、朝日から見た、
馬、雨乞、白馬岳、唐松岳、八方尾根
など素晴しい。小蓮華からとばし一息で三国
竜の下の雪渓までおりた。約二時間半、昼食
をとり展望して、幕営地を決めた。そのすぐ
上に、幕営することにして、空身で白馬往復
やせた尾根をどんどん登る。荷物があると随
分悩まされるところだ。頂上には割に人がい
なかった。半分過ぎて、あれが展望はさか
なかったが、剣、立山が望まれた。幕営地へ
帰ってからゆっくりして、三年生やOBが

働いている間遊んでしまって、全く余裕だと思った。その夜キャンプファイアーをやり野さん差入れの花火をあげた。夜空には北斗七星、北極星、カシオペア座などの星がいっぱい。きれいだった。山の夜は寒く静かだった。

八月六日　雪倉岳往復

午前四時起床。七時出発。天気は相変らず良い。石を踏みしめて頂上へ向う。途中、雷鳥の親子が我々を歓迎に現われる。人間を恐れていない。真青な空。一面のお花畑、あちこちに点在する雪。快調なピッチで一気に登りきる。八時二十七分、雪倉山頂。昨日登った白馬があんなにも俗人に見える。遠く日本海も見渡せた。素晴しい眺めだ。ガリガリとペースを落して高山植物のお勉強。おかげでグンと教養が増した。雪渓での昼食。幕営地へ着く頃、空模様は一変し、あたり一面ガスってきた。いよいよ今夜台風の接近らしい。石を積みあげてテントの補強に努める。風はますます強く、風圧でテント内は非常に居にくくなる。心配な一晩だったがこの風台風は日本海上はるかかなたに過ぎ去った。

八月七日　三国境―松本

起床三時。台風一過といえども、まだ風はひどい。しかし雨は降らなかったのは幸だった。

東の空は紫とオレンジ色の雲が重なりあって美しい。出発、六時二十分。小蓮華岳まで一気に登る。全員快調。一年生の日は小蓮華までの最後を楽しむかのように、ピッチ早い。いよいよ今日、コマ出発点見収めを終わり、一路日本海を目指し急坂をくだり、白馬大池まで来た。三ピッチ目、蓮華温泉への道は、休憩に入り、ピッチ早目、蓮華温泉への道は、天狗の庭あたりで昼食にする。元気を出して蓮華温泉を明りの日暮れ、帰路定し食は、期待はずれの幕営地だった。しかし幕営したいとも思ったが、しかし幕営したいとも思ったが、元気な一年生が数名いたことも加えておく。こんからは平坦な道で早いペースで歩く。つり橋のを渡り、私達をぬいて行った。五分の小休憩後、十四時八分栂池に到着。バスの中に逆戻り、日に焼けて光っていた。昼食後、初火開、ペコペコのお腹をしてのタ食をとった。二十時四十分の松本行に乗る。列車はすいていて非常に疲れる。生の陽気はおしゃべりが車内に響いた。一年生は本当に恵まれていた。旅人は一人も出なかったし、天気も良かった、長いテント生活の経験はれ達それぞれの中に何らかの形で残ったであろう。私達はまだまだ未熟である。

かし私達はこの夏山合宿を大きな土台として、来年、さ来年と伸び前進してゆこう。

八月八日
新宿着、五時五分。

○コースタイム

8/2 8/3
新宿 23:00
信濃四谷 6:28
6:40
赤抜 8:15
9:18
神の田圃 13:25
14:00
成城大小屋 14:40
14:50
栂池 15:18

8/4
発 5:59
天狗原 8:10
乗鞍岳 11:00
白馬大池 11:55

8/5
発 6:10
小蓮華山 8:20
8:30
幕営地 9:00
11:27
白馬岳 12:02
13:05
幕営地 13:43

8/6
発 6:57
雪倉岳 8:22
9:14
幕営地 12:18

8/7 8/8
発 6:20
小蓮華山 7:10
7:20
白馬大池 8:10
8:40
天狗の庭 9:20
10:15
蓮華温泉 11:14
12:40
栂池バス停 14:08
14:50
平岩 15:47
16:20
新宿 5:05
解散 5:15

○夏山合宿食料計画

	朝	昼	晩
3日→栂池	弁当	カンパン・レモン 粉末リーダ ピーナッツクリーム	飯 カレーライス 漬物・麦茶
4日→大地	飯 味噌汁 納豆	カンパン・キュウリ 粉末ジュース イチゴジャム	混ぜ御飯 吸物
5日→国境	焼きそば 麦茶	カンパン・レモン 粉末リーダ ピーナッツクリーム	飯 シチュー 漬物・麦茶
6日→停着	飯 ゴシリメスープ 漬物・麦茶	カンパン・レモン 粉末ジュース イチゴジャム	ベーコンライススープ
7日→帰京	イタリア風リゾット 漬物 麦茶	クラッカー・チーズ 粉末リーダ ピーナッツクリーム	自由

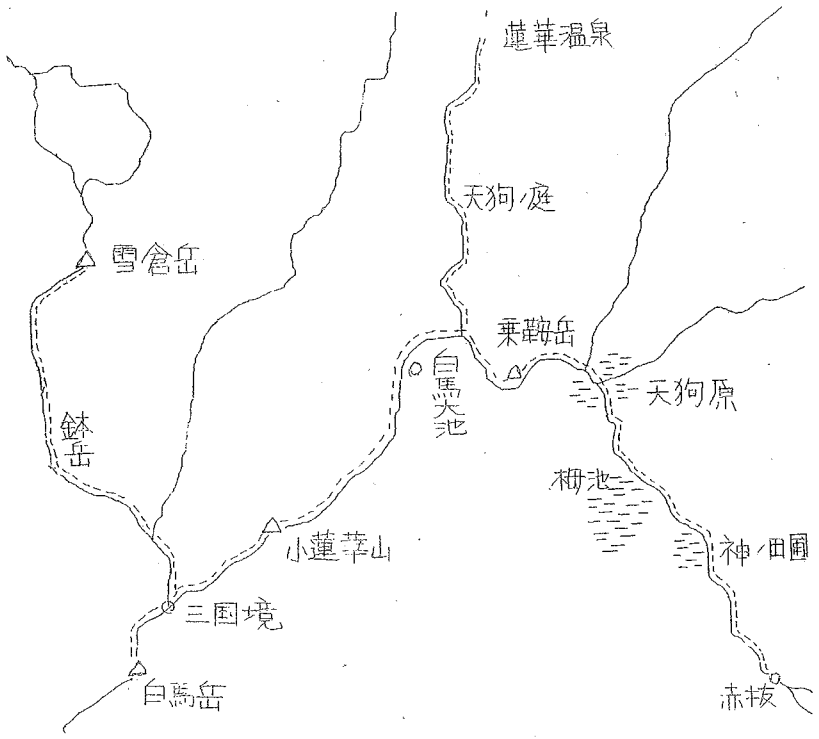
○夏山用器具一覧表

幕営用器具

テント	NO 17	一式	一〇・一kg
同	NO 15	一式	九・九
同	NO 14	一式	一・五
張綱		二本	一・三
スペア		一本	〇・五
スコップ		一本	
ナタ		一本	
ラジウス（大）		五台	一一・二
			三一・五kg
			一・八

台皿	五枚		
メタ	一三缶	一・三kg	
石油	一三ℓ	一三・〇	
石油用ポリタン	五個		
石油用ポンプ	一本		
パッキングスペア	二種		
マンドリンスペア	六本		
三脚スペア	一本		
ローリク	九本	〇・五	二六・〇kg
針金スペア			
ツェルト	一	三・〇	
携帯ラジオ	一台	二・〇	
天気図	二〇枚		七・七
目覚し時計			
寒暖計	二台	二・〇	
	一個		
ピッケル	三本		
カメラ	二台		
炊事用器具			
食器	三八個		
鉈	五本	一・四	
丁			
しゃもじ	二本	〇・七	
おたま	三本		
コッヘル	二組	三・四	八・二
ペーパー	八巻		
クレンザー	一箱	〇・五	
タワシ	三個		

まな板	二枚	
バケツ	一個	
総重量（※ピッケル・カメラを除く）		
		七五・二kg



一年感想文

ワンゲルに入って

三枝　みのり

私が高校生になって入うと考えていたクラブは、バスケット・水泳・演劇・ESSの四つでした。それぞれ理由はありましたが、このうち、どれにしようか迷っていました。ところが、入学式の後、校庭で二年生の先輩に色々と説明され、男子の夏山のスライドを見て、なんとなくワンゲルに入ってしまいました。つまり理由といった理由はなく、先輩の話につられたようなものでした。

私は中学校の頃、運動クラブに入らずに文化クラブに入り、あまり積極的に活動もしていなかったので、高校になってはじめてクラブの楽しさを知りました。

最初の練習に出た時、軽いトレーニングだということでしたので、安心していましたが、やってみると私には相当厳しく、これは大変なことになったと、内心心配になりました。入学したてで、学校の勉強の進度や方法に慣れず、まごまごしていた時でもあり、山といえば、林間学校やハイキング程度しか知らない私でしたから、少々恐れを持っていた事もありましたので、続けていかれる自信は全然ありませんでした。

四月の新入生歓迎会・川苔山も、その時、勉強の方でグロッキーになり、丁度用事もあったので、とうとう行きませんでした。これは今考えると残念でたまりません。とにかく私達一年生にとっては最初の山行で色々と印象が深く、今でも度々話題に出るのに、私はただ聞いているだけです。私にとって一回目の山行だった三頭山はずい分つらくて、登っている時には、汗はダラダラ、足はもうセメントで固めたように動かなくなりそうでした。やっと頂上に着いて飲んだ紅茶は素晴しく美味しく思えました。考えてみると、合宿で白馬岳に登る前に、私は一回しか山に登ったことになります。日原では幕営しましたが、初めての経験で、少しも眠れず苦労しました。あの時は雨が降ってくれて助かったような気がしましたが、後で本当に登りたかったと思いました。夏山合宿は素適な経験でした。合宿というのでしごかれるのではないかと思っていましたが、楽しい思い出ばかりです。クラブの友達と良く知り合えた事が最も大きな収穫だったと思っています。

私はクラブに入って体が強くなった事や、良い友達を得て、自分にとって大変利益にな

りましたが、勉強との両立の難しさも知りました。一学期は夢中でしたし、何をするにも自分の時間というものを見つけるのに苦労します。現在の二年生は、私から見ると不思議なくらい何でもこなしているという感じで、私が来年そうなれるか疑問ですが、試一杯やりたいと思います。ワンゲルは他のクラブの人達からも楽しそうだと言われます。それは、全員が協力し合って山に登る、そんな所から全員の気が合うからだと思います。技術を高める事もそうですが、この全員の気持ちの通じ合いが最も大切だといえないでしょうか。

雑感

八島　久男

この部に入ったのは今年の四月、新入生としてでした。毎日毎日のトレーニングや、毎月の山行はそれぞれに苦しいものでした。しかし、これらは自分の身体を鍛えるためのものだし、それだけの覚悟はありましたのでいなんとか、半年たった今まで続いています。入部してみて、感心させられたことは、部の運営が、ほとんど部員によって行なわれていることです。クラブ活動のクラブ活動としての意味はこういうことにあるのは、言うまでもありません。運営のうまいかへたかは別として、部員自身の手で行なっているのは大変意味があると思います。

しかし、この運営は生徒が行なっているということのためにしばしば押えられるようなことがあります。それは、学校当局です。本校の先生は皆、年寄りばかりで、この部を責任を持って指導できる先生がいないというやむを得ない事情もあります。そしてまた、山登りが、特に積雪期等では、他のスポーツに比べて危険性が高いのも事実でしょう。しかし、単に、これだけの理由で、私たちの正当かつ有意義な活動が押えられるものでしょうか。

これは、本校だけの問題ではなく、広く教育行政の問題だと思います。教育を行なう人間――青少年の教育に資金を出す人間の立場からいえば、青少年が登山をすることなんかあまり価値がないことでしょう。なぜなら、青少年の登山に投資をしても、その結果として、よい労働力になって帰ってくるとは限らず、その上、もしも死んでしまったりしたら今までの投資が無駄になってしまうからでしょう。

文部省の方針も、こういうことに根ざしていると思われます。文部省は高校生の冬山登

山を禁止しようとしているようです。しかし、私達としては、自分たちの力で登山することをやめることはできないでしょう。なぜなら、私たちは、文部省や両親のために勉強しているのではないからです。私たちの行動は、ただ自分を高めようと試みているのです。

話が大分それたようですが、私が、夏山合宿を経験して、私には解けない疑問を強く感じました。それは、「何故、私は山に登るのか。」ということです。今までは、山の自然や山の人々の生活にふれ、身体を鍛えることをただ漠然と目的として登り、深く考えたことがありませんでした。これからは、この疑問を解き明かす努力をしようと思っています。

ワンダーフォーゲルに入部して

羽柴　春実

私がワンゲルに入った動機は実は、山が好きだからでも何でもなかった。長屋を見学した帰りて、二年生につかまってしまったのが事の始まりである。それから何となくスライドの映写会を見に行き、上手に口説かれて、何となく名簿に名前を書いてしまった。「遠足にちょっと毛のはえた位」という言葉をそのまま信じて、本当に気軽な気持だったのだ。

後悔しはじめたのは新入生歓迎会で川苔山へ行った時からだ。キャラバンという大きな靴をはかされ、二年生のかつぐ大きなリュックを見て、くたくたになって帰って来たとき、ああ、大変なクラブに入ってしまった。本当に後悔したものだった。「ワンゲルに入ってよかった」と思ったりもした。

聞いて両親は目をむいて入るのに反対したことがあったのだが、「言うことをきいておけばよかった。」と思ったりもした。

ワンゲルに入ってよかったと思い始めたのは、夏山合宿の前あたりからである。そして合宿が終わった今ではもうやめられそうにない。

夏山については家でもずい分心配してくれた。中学時代私は小さくて、やせっぽちで顔色が悪かったから、父などは「無理だ」と言っていた。自分でも自分の体力にひけ目を感じていたから、初めて荷物をしょって歩くのは不安だった。だがバテもせず皆と帰ってこられたのが我ながら不思議だった。でも自信ができたように思う。

このごろは部室の雰囲気にも少しずつ慣れて、昼休みなど時々遊びに行くようになった。そして少しずつ食料係の仕事を二年生に教わ

りながら後手伝っている。教室では自分をいてもいなくてもわからないような存在に感じることがあるけれど、クラブに来れば仕事もあるし、トレーニングをさぼれば注意されることもある。一年生同志おしゃべりをしたり、計画をたてたり、と自分の居場所があるという安心した気持を味わうことができる。もう二学期になり、一年生にも仕事が割り合てられるようになって、少しずつ自分達の責任というものを感じ始めている。来年は私達一年生も二年生になるわけだ。それまでに食料のこと、家具のこと、その他いろいろなことを覚えねばならない。

そして近ごろでは、「来年は大変ね。」とか「来年はたくさん一年生を入部させなきゃ」とか「今年の二年生みたいに上手に話さない」とか「でも今年の二年生みたいに上手に話さない女の子は敬遠して入らないかしら。」などと一年生同志話し合ったりもするのである。

ワンゲル部について

菊池 治男

業はこの部に入って良かったと思っている。入部した主な理由は、正直いって山が好きな為ではなく、他に入る部がなかったからだ。こう書くと他の部員におこられるかもしれないが、中学時代、体を鍛えていない者にとって特に技術を必要としないことは入り易い。

全然経験のなかった登山も、もう四回になる。五月だったかにワンゲルのシゴキ事件が起こったが、もし入部前だったなら、親が絶対に許してくれなかっただろう。今までワンゲルというものがあまり有名でなく、それがあのような形で有名になったのは本当に迷惑だ。ワンゲルは比較的地味な部だと思うが、我がワンゲルは学校内でも最も活発な部の一つだ。

トレーニングは、どうも好きになれない。僕にとっては苦しいが、やり終えた後はスッキリとして何とも言えない充実した気持ちになる。

九月の初めての個人山行は、また違った感じで楽しかった。天気がよくて景色がきれいだったし、個人プレーも多く、特に先輩連に追いたてられなかったのは良かった。トレーニングやつらい山行ばかりではいやになるから、このようなものもたまには良いだろう。

苦しい目をして何で山に登るのだろう。景色が美しい為か？頂上に着いた時の気分が良いからだろうか。僕にはまだそれがわからない。しかし、何となく、言葉には言えないがその感じがだんだんわかってきているような気がする。何か不安定であやしいものではあるが。

西高山岳部の生い立ち

林武志（六期）

今年は十中山岳部創設より二〇年を数える事になりました。時も移り、十中山岳部もしくは西高ワンダーフォーゲル部と変ってきました。

十高山岳部、西高山岳部そして十中山岳部誕生の頃は混乱の最中で、食糧事情も悪く、さつまいもばかりでした。このような時代は大変多かったようです。第一回の山行は奥多摩の海沢へ、一般生徒に呼びかけ約八〇名が出かけました。大岳頂上へ最後に到着した生徒はもう薄暗かったとか。今考えれば全く無茶な山行でした。その頃は山へ登ることは遠足の延長と大差なく考えられていました。

その後次第に山岳部の山登りは遠足とは根本的に異なるものであると認識され、もっと組織的に、計画的に、スポーツとして考えられるようになりました。部員の一人が個人山行中転落事故を起こしたり、一層組織的な活動、サークル化が要求されてきました。二七年夏には奥秩父主稜縦走を部の全力を結集して完了し、山岳部としての組織的な活動を始められました。

二七年三月大菩薩より三頭への多摩川南稜縦走を行った。夏用テント二張を外部より借用し、炭俵を敷き、毛布を一枚で眠り、炊事用は、炭俵を用いました。キスリング型ザックも足袋も全員には行き渡らず、本式の登山靴も一足なく、草の放出品を改造したものでした。遠足の装備も食糧も不充分ではありましたが自分達の力でルートをひらき、雪の中に幕営するという貴重な経験を得ました。

この年初めて女子部員が生れ最高六名になりましたが後続なく、二年間のブランクが続きました。女子部員も年代に切れ目なく続くとその指導にも常に良いと思われます。又この年の夏は初めて山岳式山行と表銀座の二班に別れて横尾で合流し、表銀座へ入りました。裏銀座部員は温泉へ入りガスに入りました。岩登りのザイルワークもリードなるものと、西高山岳部で外部からの指導を受けました。この時とこの年の一番直接指導を受けたのは裏銀座の縦走には当時教頭の都築先生が参加されました。

この年の暮に初めてのスキー合宿を細野で行いましたが、その前、例年に大事件が起りました。

にっ考てきていますが、多少の無理もあって遂
した。十日の山行は山岳班、ハイキング班、
O.B.れぞれ独自の計画を実施しました。ともかく
の仲裁で一本化することになりました。
問題となる部の目的及び組織運営を成文化し、
ておくことが第一目的であるとのことで部則の特
定を行うことであり、目的はスポーツとしての登
山を行うことでした。経度はハイキングとしての資格を持つこと
リーダーとしての資格に基づく無責任な幣害を
組織は従来単純多数決によるリーダー級の部員によって部の運
くすため、リーダー制度を設けた。
営をするように部員制度を設けた。
部員は新人、そして山行日数及び経験、技術人
等の項目別採点をし、基準点を越えるものを
それぞれ準備員、正部員と進級するようにした。
部の決定機関は正部員より選ばれ、又部のサブリーダー
行のリーダー及びサブリーダー二名は正部員
つの互選により定められた。部員の進級は正部員
の互選によって審議された。

軌道に乗り始めました。三四年頃から年代の
断層と西明登高会の決滞等により暗い迷りが
悪く中断した状態であるようです。
ぐ大雑ぱなことですが、私たちの一部を記

しましたが大小さまざまな歴史的事柄は折
にふれてお話しすることにしましょう。

四捨して二〇年前西校（高ではない）にいた男の思い出

九期　松田総

一年の夏山の第一日目の朝、キスリングを
背負った時、突然ただ食べたいが食べられる。
つと
理由はない。
以後一〇日間家に帰れば、トマトが食べられる。
ねえ
という唯一の心のよりどころとし、
足る
Pという
足の豆の痛さに堪え、荷の重さに堪えて帰宅
した。家で発した第二声は「モツトトマト子宅」
であるが、トマトの味はしませんトマトで
しかなかったという
その翌年の五月のにくつついて谷川に行った。
その夜はひどい吹雪だったが明け方近く隣の
テントからひどく間のびした声で質問をうけ
た。「アノオ三角がなくなったのはどうしま
すかあなたは」自分でもすっかり懐中電燈
で隣のテントを見て驚いた。前後のウオール
がひっ飛びポールの左右に天井がヘンポンと
翻っているのである。上記質問に対する正解
は「ドーシヨーモナイ。」である。
その年の夏山についてきたO.B氏、気はやさ

しくて力持ちの良い男なんだが、食後のお茶とタバコについては何とも我々現役には理解出来ないカタクナな執着ぶりを示した。山行も終わりに近付いたある日、朝から何かそわそわしていたが、小休止の時現役を一人一人つかまえて曰く「本当にもしかしたらの話なんだけど、君タバコ持っていない？」僕らは胸をはって答えましたねえ。「ミリコナッテモラッチャコマリマスヨ。」

同じ夏山でY君が下痢をしリーダーから薬と共に絶食を命じられた。目にいっぱい涙をうかべた彼は何とか夕食に有りつこうと空しい努力を重ねたので有るが果たさず、ミルクのみで皆より早く毛布にもぐり込んだ。翌朝痛む腹をかかえししから元気を出して曰く「オカゲさまで下痢もなおり極めて快調であります。」その昼、上高地についた彼がどうなりましたかは賢明なる諸君の御想像におまかせします。

その年の秋山に一大実験を行った。重量軽減のため昼食を食パンにしてみようというのである。バター、ジャムをぬったパンをつぶれない様にダンボールにつめ出発したのであるが、当時はマナスル、ヒマラヤと初登頂が続いた時代で汽車ポッポは現在同様であった第一日目の昼食事、いや失礼!!第二日目も第三日目もでした。食料係のK君、皆に懇々といって曰く「これはオセンベイじゃないんだよ!!つぶれてもカロリーには何の変化もないんだよ!!」

当時の部誌には落書帳が有りその第一頁はこんな調子で書いてあった。

「読まないで下さい。この頁には何も書いてありません。読んでも何にもなりません。読むだけ無駄です。おやあなたは読んでいますね。おやめなさいよ!!まだ読んでいる。やめろって言うのにわからないのかなあ？何も書いてないですよこの頁には!!この頁最初に書いてあるでしょお。読むのなんかいかげんでおよしなさい。何でみれんがましく見ているんですかねえ？読んでも時間の無駄です。まあそんなにかま？なんですか？読んでも何もとくになりませんよ。読むのはおよしなさい。…………」てな調子で一頁がぎっしりうまっていた。当時はひま人が多かったんですかねえ。

三年の春八ヶ岳河原沢奥壁に行った。沢の途中に一ヶ所いやなトラバスが有りどうしようかと思ったが僕には絶対オッコチナイ自信が有った。なるほど山ではオッコチナかった。日々のトレーニングのたまものである。しかしもう一つの方のトレーニングは全く不

足であったというお話。

あのころ

川田秀明

一年の時の夏山はひどいものだった。コースは弥陀ヶ原―雷島沢―剣沢―仙人池―阿曽原―宇奈月。一日目は美しい平から遥今。ここは誰が考えても、楽しくバスに揺られて行く所なのに、どう間違えたか徒歩。霧で何も見えない、湿原の、いまにも熊でもでそうな追分小屋の側で幕営。英語と国語の先生が一緒でテントの隅に小さくなって。最初からついてないかった。夜半より雨。川の中で寝たようなものだった。朝霧の中に列に並ばされ、その前に、当日の背負ったやく荷物が、ドサッとおろされる。数々とパッキングされ、ぞろぞろと投げ出される。金中で剣岳を終えたOBが十名近く参加。当時の山岳部を卒業した血気盛んな人々によって指導されて、関係上代々に対しても誠に厳しいものだった。地獄谷で昼食。霧の中をすごい体格をした二年生の方々にゴかれながら下を向いたまま雷島沢を登った。慣えているのは雨に濡れた石ころだけ。大学に入って再来した時、驚いたね。豊に残った雪。花の咲き乱れる草原。石をまさこみながら流れる川。

わげの下にかすむ地獄谷。黒々とした剣の峰。高校の時は何しに来たのかと思った。三田平に三日目の幕営。OB、二年生協議の結果現役は栄養失調の気味があり、疲労度ばいしていることになった。一日の食料代七〇円。半分生の飯にコーナゴが五、六ピキ。金魚のエサの様なフリカケ。仙人池―祖母谷―白馬岳―大雪渓のコースは取りやめになった。そ、の知らせを聞いた一年生全員、大いに喜んだ。当時は冬山も春山も行なった。一年間の集大成として春山を置いて、岩登りの初歩的な練習も夏山で行った。だから雪上訓練グリセードなどある程度楽しいものなのにそんな余裕は全然なかった。練習中はひとことも口をきくことを禁じられ、耳がかゆくて立ちもしゃべることもOBにとがめられた。滑って行って、止まってもOBをはずしていた。ゴーグルをはずしてメガネをはずして、目を細くして上にいるOBを眺めた。くのでメガネをはずして、目を細くして上にいるOBを眺めた。出来ばえを聞こうとした。一人のOBが笑って、何か大声でわめきながら、ピオレを片手に、素飛んできた。訓練より、OBが恐くて小さくなっていた。純情であった。次の幕営地、仙人池には午前中に着いた。池に剣岳が映っていて、山行中の唯一の心安まるひと時であった。元気が出て、晩飯、とびきりうまい物

を作ろうとハッスルした。取り掛かったのは一時であった。そのうち雨が降ってきた。当時はまだ薪で炊いた。フライがなくて、苦心して燃してもすぐ雨で消された。他のテントから女の子をまじえた歌声が聞こえる中でパシッまでびしょ濡れになりながら、くすぶっている薪に風を送った。三十人分を一度に炊くのは真中の米が　すこし盛り上がる時はすでに夜になっていた。歌っていた他の仲間も疲労で寝込んでしまい、しんとした雨の降る暗やみの中で、しゃがみ込んで煙で目を充血させながらもそもそ火をつけていた。二年生がっお前等、テントに入って休め。」と言ってくれた。僕達が風邪をひくのではと心配しながら、寒さにふるえて、テントの真中で下を向いて座っている先生のわきに座った時、急に涙が出た。家が恋しかった。十一時に晩飯が出来た。米はとうとう炊けなくて、お湯の中にスープをとかし、フランスパンで食べた。実に十時間の苦闘の結果であった。

こんな山行をやっても部に残る者が僕を混ぜて何名かいた。この矛盾に悩んで自分達なりに理屈を探していった。春山でいくらかの光明を見つけて、新人生を迎え入れた。二年の冬から学校の圧力がかかってきた。春には参加を思い止まるようにと学校から部員宅に連達も出された。があえて春山も行なわれた。色々な困難の中でそれぞれ自分なりに考えた。そしてこの春山の終了後、また新たに光明を見つけた様だとみんな言っていた。一年間春山を目標に当時の部活動は行なわれた。そしてこの過程で、僕等自身も　活動とともに、進歩したようである。

無題

尾崎　純理

弓削さんに初めて会ったのは去年の歓迎会の時だった。僕も今年早大に入学した新人で、すと学生服に身を包んで御結と団栗との間の子みたいな顔をして楽しげに話していた彼は今年も去年と同じ格好をして又、泊り込みに来た。僕みたいな人間が山岳部を続けられるかどうか分らないよと語った彼は僕等の不手際に対して怒鳴らず、悟すように注意したものだ。

強化合宿から帰って来たら野々から悲報を聞かされた。遠足の日が葬式の日であった。線香をあげた後、三年全員は誰が言うともなく海岸に足を向けた。人気のない海岸には子等が無心に戯れ、広い砂浜に江の島が遠かった。そしてさらに遠くに、水平線があった。

個人山行レポート

南アルプス

参加者　伊藤・山野・平野

私達は、この山行を八月二十日から行なう予定だったが、おりからの台風二十号の為に二十三日から六日間の山行とした。

八月二十三日・曇りのち晴れ。

私達は台風の去った東京を後に高尾駅に集まった。私と平野はほぼ定刻に来たのだが、山野が大変な遅刻をしたのである。この為予定の甲府行電車に乗れなくなってしまった。でもそんなことは気にかけず未知の山々南アルプスに心をはずませ、私達は次の電車の客となった。甲府で昼飯。これでしばらく町の食事ともお別れ。甲府から芦安までバスに揺られて一時間。ここから広河原まではマイクロバスなのだが、時間が遅かった為うまく乗ることができず、今日の広河原行きは断念。この芦安で幕営することにした。川の増水の為河原に張ることができずやむなく学校の校庭にテントを張った。校庭では夏休みのクラブ活動だろうか、バレーボールの練習をしているなど。そのボールが時々テントに飛がってくる。山に登る志を立ててきた者にとって少しばかりみっともない初日となった。

八月二十四日。芦安―北岳

起床二時二十分。芦安を一番のマイクロバスで出発。車中は他の登山客で一杯。野呂川林道の夜叉神トンネルを越すともうそこには朝焼けの北岳が……。早朝の広河原は気持よい。私達三人の顔には早くも闘志がみなぎっていた。「よいしょ。」キスリングを背負うとピリッと身がしまる。りっぱな橋を渡りしばらく河原沿いに歩く。御池小屋、小太郎尾根のコースを行く為河原とはじきに別れ、急登をあえぎながら登って行く。御池小屋まで二時間二ピッチ。御池小屋からは北岳が近くに眺められる。後ろには鳳凰三山の葉師、観音、地蔵の山々が美しかった。しかし残念なことにまだまだ鳳凰の方が高く見える。ここで昼休みにし精気をたくわえ小太郎尾根を目差した。尾根まで位何ということはないと思って登り出したが、それはとんだ間違い。最初は急登の連続。また森林限界を出るとすぐ上に稜線が見えているのだがなかなかそれが近づかない。全くそれどころではなかった。二時間かかって稜線へ。この稜線は今までの苦労を一気に吹き飛ばしてくれた。そこには三日後に登るどっしりした素晴しいカールの持主

である仙丈岳、また四日後に登る花崗岩で白茶気た甲斐駒ケ岳などが私達を迎えてくれたからだ。ここからは気を楽にして尾根伝いに肩ノ小屋の幕営地へ。午後は稜線のお花畑で昼寝。山で昼寝をするのは大変気持がいい。二時間位寝転がっていたが実をいうとこんな長い間そうしていたのは山に登りだして以来初めてのことであった。しかしさすがは三。。米の稜線である。夜は寒くて風が強く、大分テントがバタバタした。

八月二十五日。快晴。白峰三山往復。

まず、何のことはなく北岳山頂へ。途中で日の出。五時二十四分。北岳の山頂からは朝が早い為、周囲の鳳凰三山、仙丈岳、間ノ岳農鳥岳がはっきりと見える。どんどん飛ばして間ノ岳へ。ここの登りは結構しつこく、空身でも案外バテる。振り返れば今さっき登った北岳の雄姿がくっきりと大きく見える。前方には農鳥岳が意外に低く眺められた。間ノ岳から農鳥とのコルまでずい分下る。がしている為気を使う。農鳥小屋で水を補う。しかし、この水はタンクにためてある水なので少し臭く、飲んでもあまり気持よくない。すぐ小屋を出て一気に農鳥岳へ。農鳥岳はあまりかっこのよい山でもないが、晴れている為、塩見以南の南アルプスの山々、また富士山などの眺めがよかった。ここで昼飯。粉末ではあるがバーモントジュースがすごくおいしかった。私達は気を弛めることなしにすぐ今来た道を北岳へと戻って行った。

八月二十六日。北岳―仙塩尾根(高望池)

北岳から両俣へは急な坂を下るのだが、それ程道は悪くない。でも多少の倒木はある。沢に出たところで山崎の〃サシイレ〃のカルピスを飲む。溪流の水で飲むのは非常にうまい。沢との出会いから両俣へはこの沢を行くのだが、ケルンが所々にあるだけで道があまりはっきりしていない。かわるがわるトップをやりながら川を右、左に渡りながら両俣まで行く。両俣小屋はここから三、四分下ったところにある。ここで昼飯にする。残りのカルピスを飲みつくす。カルピスのことをやたらと言うようだが実際にすごくうまいのである。ここから野呂川乗越へのルートは途中少しはっきりしない箇所がある。乗越からは仙塩尾根を高望池へと向かう。この辺は登山者も非常に少なく、また野鳥も多く、私達を常に励ましてくれた。小さなピークを三つ四つ越えると高望池がひょっこり現われた。静寂そのもの。人も他にいないし、水場も近いし素晴しい幕営地であった。

八月二十七日。高望池―仙丈岳―北沢

峠

今日はいわゆる馬鹿尾根（仙塩尾根）を仙丈岳に向けて登る。それほどの倒木にも悩まされずニピッチで大仙丈へ。晴れてはいたが風が強く、また少し霞んでいた為それ程の素晴しい見晴らしとは言えなかった。でも白峰三山、塩見、あす登る甲斐駒などが展望できた。少し休んでから仙丈岳へ。ここは大部やせ尾根である。仙丈の直下に丈小屋で昼飯。この小屋は無人。昼食後はこの小屋の屋根で昼寝する。北沢峠まで一気に下る。それと同時に、前方の明日登る甲斐駒がどんどん高くなっていった。北沢では広原に幕営地があるのだが、私達は隣接している無人の長徐小屋に忍び込み、素晴しいこの小屋で贅沢な気分に浸りながら今山行最後の夜を送った。

八月二十八日。北沢―仙水峠―甲斐駒―下山

まず、仙水峠。高まり見晴らしのよい峠ではないが駒がでっかく見えている。ここから駒津峠を通り、一度摩利支天へとまいて頂上を目差した。しかし、まき道は非常ないざし場であってすべり易く、あまり良い道とは言えなかった。後の話であるが、却って多少の岩場があるにしろ直登ルートの方が良い道であった。駒ケ岳八時三十五分。ここに私達は今山行最後のピークを踏んだのである。天気は本日先ほど晴。北アが僅かに霞んで見えなかった以外白峰、鳳凰三山、仙丈、塩見、八ケ岳奥秩父、または中央アルプス……。これら三百六十度の展望が楽しめた。

この山行は私達の山を私達に一層近づけてくれたのであった。それはこれから西高ワンダーフォーゲル部の指導的立場に立つ私達にとって大いに自信を満たしてくれた。こんなことを考えながら、私達は一路東京へと向かったのだった。

奥秩父主脈縦走

期日　八月一〇・一一・一二日

参加者　山野・平野

以前から力モシカ山行をやりたいと思っていた我々は、三年生の刺激などもあり、奥秩父へ行くことに決定した。増富から金峰・雲取を経て鴨沢までは、コースタイムにして約三五時間、四日から五日かかるコースである。前日から行き、金山で泊っておくことにし、また食料はすべてパン・カンパン等にした。増富から金山まで単調な道である。金山小屋で我々は、しばらくのんびりと過ごし、明日は頑張ろうと思いながら寝た。

翌朝、弁当を食べ、星空の下　金山小屋を後にしたのは　午前三時ちょうどであった。金山峠からいよいよ登りとなる。快調にとばし、富士見平を過ぎるあたりから明るくなった。そして金峰頂上についたのは、まだ六時前であった。御像石に登り少し休んだ。目の前に国師、その後遠くに甲武信が、後には富士などが見えたが　南ア方向は雲に隠れて見えなかった。

大池で朝食をとり元気を回復して国師へ向かう。この登りもたいしたこともなく、国師頂上へはじきに着いた。もう大分来た。しかしこれから先の長い行程を思うと厳になった。甲武信までは小さな起伏が意外に多く甲武信へ着いたときは相当バテていた。振り返れば今朝通って来た　金峰が遥か遠くに見えた。半分位来たなと思った。まだ昼前であった。小屋まで降りて食事を済ましし、雁坂峠に向かった。途中雨が多少降った。雁坂のお花畑を見、雁坂峠を過ぎる頃には、陽は西に傾いた。そして笠取小屋を通過したのは、午後六時、まだ明るかった。ここからは長い長いまき道がどこまでも続いている。将監峠に着かないうちに　完全に暗くなってしまった。将監の手前で夕食を食べた。ぼくの懐電は今朝から豆が切れていて使えなかった。予備球を忘れたのは大きな失敗だった。そこで将監小屋へ行くと　親切にも豆電球をくれた。おやじに夜はやめた方がいいと多少留められたが我々は行程を続けた。

ここからが長かった。いくら行っても険しい道はどこまでも続いていた。何回となく踏み外した。懐電の光だけではばせない。雲取は遠かった。予想以上に時間がかかる。眠気との戦いだった。やがてやっと三条ダルミに着いた。ここから直登二。〇メートル、三〇分の後、我々はひょっこり雲取避難小屋の前に出た。頂上に立ったのは午前二時半。昨日金山を出発してからすでに二回時間近い時間がたっていた。我々は遂に雲取まで来た。避難小屋で食事をし、ついに寝てしまった。午前五時だった。あわてて鴨沢へ向かった。鴨沢に着いたのは、七時少し過ぎ、うまくバスに間に合った。

この山行、初めからやれる自信はあったが、さすがにたいへんだった。このような山行、無謀だと言われるかもしれない。しかし一度はやってみたい山行であった。

特別寄稿

不思議な山の力

吉田　慎次郎

山というものは不思議な力を持っているものです。私達の仲間を八人も馬鹿にしてしまいました。そしてさらに彼等がああだ！こうだ！とさも主体性あるかのごとく、へ理屈をつける。それも不思議な山のかのいさんです。我部のBへすばらしい」達主実は皆その力にだまされてきたのです。それなのに未だ頑張って息張っている人もいるようです。今年の一年生門特に女子」なんかもう話になりません。こんなこと書いている私自身全く奴隷かあわれな忠犬以上には、なれないのだから、いくら刺激してもあれれなる子犬は、もう逃げっこないでしょう。いやいや踏んでもケ"てもあわれなる子犬は、しょせんあのきたない部小屋で育つ運命なのです。これも不思議な山の力です。偉大な犬の先輩も門しかしやっぱり山の、のぼれ。のぼれ。という声にだまされているのには変りありませんが」奇妙な理屈を作ったものです。たとえば偉大な犬は皆の食いしたこソ汁のかき集めと！こげたまんまをかき回し、ふぶり食いつきフウヒヤーうまいしなどとほほ、全く涙ぐましきお話です。これに対してコはんとね。Lなんて同調する彼、彼女」未だ結論出ず」が住んでいる小屋でもうこれ以上この話を続けることはやめましょう。

犬も成長し目方もふえれば山との万有引力もなんとかの二乗に比例して強くなるのは賢明なる諸君はもう勉強ずみ。彼らは引力を克服する為に先ず自らをだまし、親をだます。それがすむと彼等はどうするのか、登るのである。登るのであります。ザイルを使いハンマーを使い、さらに涙ぐましきボルトというもの迄使っている偉大な先輩がいるのであります。偉大な岳犬諸兄は偉大な岳人諸兄となる為にやはり不思議な山の力を研究し、かじりつづけて来たのであります。されば我犬小屋の住犬も住人になる為に引力を安全かつ完全に克服する為に、不思議な山の力に挑戦しかじりつづけねばならないことが理解出来ましたか。いや全くふざけた文章です。なぜかってそれは私も御存じのとおりやっぱりあわれな岳犬だからです。

鳳凰三山春山合宿

野菅和興

本年度は、鳳凰三山で春山をやろうと決定したのは九月のことでした。実際八月までは春山などと言ってもピンとこず、まだ遠い先のことの様に思い、ただがむしゃらに山に登りまくっていた感がありました。だが夏山が終ると、部員間に目標意識が振け、一体感が欠けてきたように思われたので早急に年度後半の目標を決定する必要があったのです。そして我々の実力からいって妥当だと思われる山でしかも体裁もいい山ということで前記の様に決定しました。また我々の雪山での経験不足を補うために一二日にテントを使ってのスキー合宿、二日に雪上訓練を計画しました。私と丁、Kの三人で現地を偵察してきました。天候に恵まれず写真もあまり撮れず、山を十分に見てきたとは言えないのですが、実際に予定のコースを三人で歩いてきただけでも十分に偵察の意義を果たしたと思います。

期末テストの間　各係は猛烈にハッスルし、準備を着々と整えていきました。こうして三月十三日になりました。

〔三月一三日（土）〕曇、西風強し

早朝のガランとした新宿駅におサラバしたのが七時、それ以後一時半に夜叉神荘前でマイクロバスを下りるまでは別になんてことはない。交通機関の乗り換えだけである。ここで昼食にし登山者名簿に記入後出発。今年はまったく雪が少ない。足元で落葉がカサカサ音をたてる。が峠近くともなると積雪もかなりの量になる。ヘが結局この山で一番の積雪量を示したのはこの一七〇〇メートル付近だった。そして峠に出たとたん猛烈な西風の洗礼を受ける。耳が切れる様に痛い。ザックの底の毛の帽子がうらめしかった。峠から三〇分程で倒木地帯にさしかかりひどく難渋する。コブシ大の石の間には薄氷が張りつめ倒木の下をくぐるには我々のザックは大きすぎるのだ。しかもここでKのザックが壊れるというオマケまでついた。合宿一日目というのはあまり面白いことは確かだが、それにしてもこの荷は大きすぎる。食料係・器具係に猛省を促したいところだ。でも午後四時には大渥山下のBC予定地に到着、強風にあおられての辛い設営だったがとにかくBCは立った。

〇三月一四日（日）快晴

昨日とはうって変った上天気、春山らしい明るい空気がキャンプに流れる。先発隊がもたもたしていたので我々の出発は七時になってしまった。サポート隊の荷は重い。だが現役だけのパーティーで行動するのは実に気味がいい。抜けるように青い空、樹々の緑、輝く雪面、いや全くコタエラレナイ。ニヒ千日、甲府側に開けた地点で昼食にする。眼下一五〇〇メートルには春霞たなびく甲府盆地が広がっている。一年の工回くってこんな山行に一年がたった二人とはショボクレだ。そのの通り三月程山が晴しい時はないのだ。南御室小屋には正午頃到着。下が一人我々を迎えてくれた。ホトの四人は上を偵察に行ったとのことである。それからはしばし日向ぼっこやソリ遊びに興じる。帰り際にはのポート代としてMのザックから桃カンを一つをいただいて小屋におさまった。

〇三月一五日（月）快晴

極地法三日ともなるとアタック隊に対するサポート隊の嫌悪感もかなりつのってくる。まして今日はBC移動の日、荷はパッチリ重い。休みに出る話といえばアタック隊の悪口ばかりだ。いたいアイツら山でかつがないとはふとどきなヤツラだ。こ天気は素晴しい。そして白根三山が素晴しい。黒い岩山、農鳥岳になだらかな山容の間に亜、そして金色に輝くあのバットレスを持った、北岳。また僕等の調子も素晴しい。設営終了後一年が吹事に精出している間Y、二人で日向ぼっこ。もうO.B.になってからのことに話がはずむ。そこへ上のキャンプからKとMが帰ってくる。彼等二人は盛んに上の様子を話したがるがサポート隊の空気はそんな甘いものじゃない。彼等もそれを感じたらしく反省の色を見せたので飯を食わしてやることにする。アタック隊は上の状態が非常に良いので本日地蔵岳まで往復してきたそうである。

〇三月一六日（火）曇て雪

二つ玉低気圧が九州付近を東進中で今日はもうどんより曇った天気だ。偵察の時ラッセルが最も大変だろうと思われた薬師岳への登りだが、こう雪が少なくてしかもクラストしているとあってはなんてことない。アイゼンでキュキュと一時間半程でA.C.（アタックキャンプ）に着いてしまった。そこから全員で観音岳に向かう。まったく雪が少ない稜線の西側では砂地が露出している始末だ。簡単に二八四一メートルの山頂に立ってしまった。別に何の感激もなかった。あまりに容易に手に

入れてしまった勝利。我々の二年間の努力というものは、こんなちっちゃなピークに通じていたのだろうか……？

記念撮影後、適当な斜面で雪上訓練に励むが、ここでも我々の意気込に対する自然の反応は情ない程である。自然に止まらないうちにピッケルで止めようとするこの涙ぐましい努力。

昼食後、Y2一身上の重大事を二日後に控えての天候悪化の北に急遽下山する。KとMが先のB.C.付近まで送っていくことにする。その後彼はA.C.に立ち寄り、KとMをそのかし工アーマット三枚を持ち出し、B.C.までソリ代りに使って下り、連日のうっぷんをついに晴したのであった。一方我々はその後も涙ぐましい努力を続け一二時過ぎにA.C.を撤収してB.C.に下った。野呂川渓谷より吹き寄せるガスにあたりの木々には美しい霧氷の花が咲いた。

三月一七日（水）雪

一晩たって起きてみればあたりの様子は大分変っていた。テントは三分の一程雪に埋れ、昨日まで春の陽光に輝いていた諸々のものは、すべてまた長い冬の眠りに戻った様だった。六時には撤収を終え一路峠を目差した。全員で三分交替のラッセルで進む。一つの曲り角、一本の木が懐しい友達の様だ。そして過ぎ去ってゆく。立ち止まり後を振返ってみる。降りしきる雪。立ちこめるモヤ、このベールの彼方、そしておそらく今に自然が荒れ狂うであろうその頂に我々の求めて来た何かがあるはずなのだ……。機会は失われてしまった。

例の倒木地帯を今度は割合スムーズに通過、峠に出る。ここでちょっとルートを失なって腿までのラッセルをやらされることとなったがすぐさまラッセルの専門家M、K、S達前に出しなんてことなくまた道に出た。やがてアイゼンの一歩一歩に雪の下から黒い土が顔を覗かすようになり夜叉神山荘前に全員無事おり立つ。

山荘の人達が温かく我々を迎えてくれた。

後輩諸君に

今回の春山は以上の様に計画実行され終了しました。それは我々の思いをすべて満足させてくれるには程遠いものでしたが、一つの思い、我々の代から春山が再び行うことができたという思いが、我々の心を満足させてくれるのです。これから以後毎年春山が行われ、諸君が、本合宿中我々の眼前にその偉容をほこらしげにしていた農鳥岳の大唐松尾根、或いは北岳の吊尾根、小太郎尾根に、その活動

を拡げてゆくならば、今回満足されなかった我々の夢もその時一緒に満足されるでしょう。が、後輩諸君が我々のこの山行をどう評価するかわかりません。高校生の冬山が禁止され山岳部がワンゲル部となった現在、春山なぞ必要ないと思うかもしれません。だがこれだけは知っておいてほしいのです。我々は単に過去の栄光のみに憧れて春山をやったのではないということを。部を維持し前進してゆくために後輩に正しい山登りを教えるために春山は必要でした。そして又、我々十八期の仲間のチームワークの結晶として何か素晴しい山行をやりたかったのです。

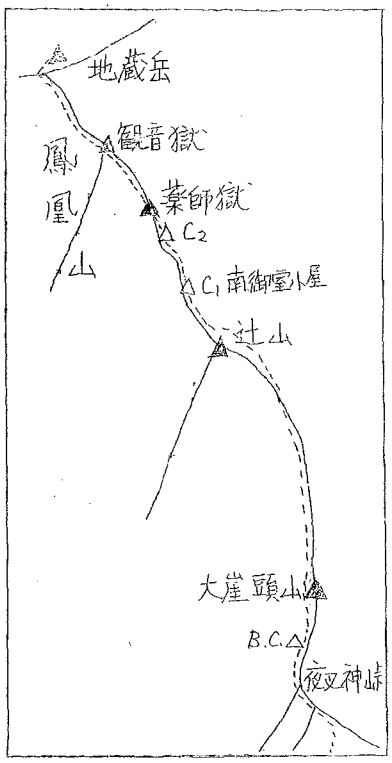
春山を行うには多くの困難があるかもしれません。だがそれを自分達に特有なものとして挫折の理由にしてはなりません。そんなものはいつでもあったし、いつでもあるでしょう。要はそんなことではありません。春山をやるか、やらないかです。それはその代のチームワークが良し悪し、前進意欲の有無、あるいは後輩への愛情の強弱といったものを如実に示してくれるでしょう。万難を排して春を目差していただきたい。

参加者

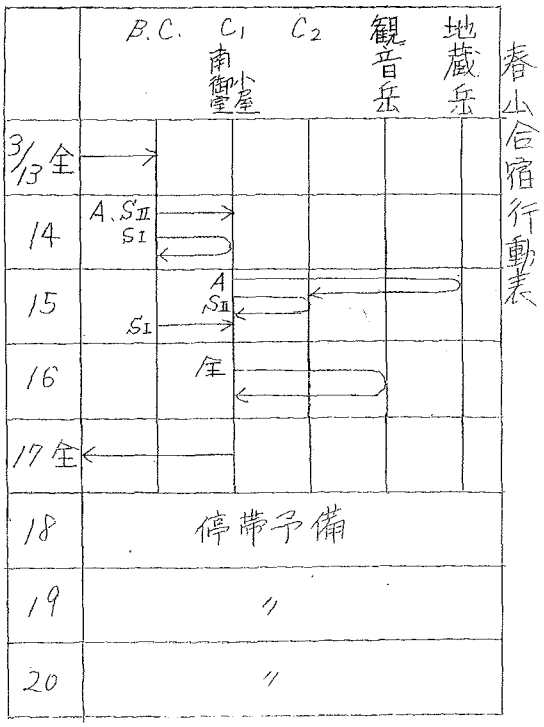
S_{II}隊 S_{I}隊 A隊

宮武 野寄(C.L) 滝口(S.L) 三浦 小川(O.B)

河野 吉田 佐藤 伊藤 山野



地図



春山合宿行動表

―スキー合宿―
おもしろかった！

〝二時新宿駅集合〟との予定であったが、終業式の当日のせいか集合時間に来ていたのは二、三人。それでも四時半頃になると全員そろった。スキー合宿は、十二月十八日試験が終わるとすぐに一年生を主体に、二年生の指導の下に行われた。積雪期初めてのせいか器具係は大変だった。それにもまして、スキー道具を集めた係人数が大変苦労した事は、言うまでもない。八時間程待っただけあって席は楽にとれた。

翌朝、信濃四谷駅に着くとすぐバスへ。そしてけ、ブル、養蚕所へ。雪が少ししか降らなかったせいか、ケーブルは長蛇の列。二時間程して黒菱に着き、そこからボッカ。女子は細野部落で泊まり、リフトでスキーとスポート。男子は隊を先発隊とサポート隊とに分け、薬大小屋付近の幕営地へ行った。一年はワカンを初めてつけたのと、雪が堅かったせいかうまく調子が出なかった。なんとか……。幕営地からは、雪をかぶった白馬三山が優しくそびえていた。

二日目からスキー訓練。まず直滑降左やった。どうにかしているうちに昼となった。女子は細野部落から来るので、ケーブルに乗らなければならないし、又四時にはリフトが止まるので、大変だった。

午後は自由練習。八方尾根は、上越のスキー場とは大分ちがって、ゲレンデが長く、広く、又景色はと云えば、白馬三山などを背景としているので、とてつもなく美しかった。三時をすぎると気温も下がり、四時頃には零下になって、人も全然いなくなった。

夜はラジウスをたき、歌をうたった。〈罵声をあげただけ。〉食事を終って、食器など洗いに外に出た。吹く風が冷たくてしんしんと夜が更けるのが本当にわかるようだった。涙が出てとまらなかった。

三日目は昨日来の新雪が二〇センチぐらい積っていた。斜滑降、ボーゲンなどやった。昼すぎ〝正月を山ですごす人々〟のニュースに載せるために、テレビのカメラマンがやって来た。〈二月二八日の正午と七時のニュースにのった。〉指導部創立以来の珍事とあって、部長さん以下全員猛ハッスル。夜、寝る前に外をのぞけば、空一杯の星。名すぎてきもちが悪い。都会ではとうてい望めない事だ。

翌朝、天気は快晴だった。八方の反対側の越後の山々、八ヶ岳、奥秩父、南アとすごい

展望であった。又、白馬三山は朝日を浴び、他に比類のない程美しかった。朝の短い時間に、山が何色にも変わるのがわかるくらいだった。

その日も翌日も終日練習にくれ、下山日になるとテントを撤収し、九貫ほどの荷をかついでころがるように降りた。

新宿に着いたら、そこには我等と別の世界があった。都会は寒く感じられた。空を見たら、山で見た星空とはうって変って、ネオンの毒々しい色しかなかった。

晦日の夜は冷たかった。

○期日　一二月二五日～三一日

○参加者　野寄（C.L.）　三浦　吉田　宮武
滝口　佐藤　河野　尾崎　伊藤　山野
小川　関谷　平野　吉村　佐久間
西村　井口　高木
目沢　橋本　川田　野原

山行総覧

一九六三年四月　川苔山新人歓迎会
五月　御前山
六月　雲取山
七月　北アルプス唐松朝日縦走
八月　北アルプス唐松縦走
九月　桧洞丸
一一月　夜叉神峠
一一月　七ッ石山
二月　長久保峠（奥秩父）
三月　塩見スキー合宿
川苔山新人歓迎会
御前山集中山行
大菩薩峠縦走
六月　雲取山

一九六四年
一九六四年
七月　北アルプス槍縦走
八月　中アルプス木曽周辺
南アルプス塩見聖縦走
九月　小川谷周辺
一〇月　春山偵察
一二月　倉見物
一三月　八方尾根スキー合宿
二月　雲取山
三月　南アルプス鳳凰三山

編集後記

編集をはじめたのがほんの一週間前。記念祭までには何がなんでも作りあげようと張った。どうにかかっこうはついたものの、その内容の密度においてはいささか自信がない。すりあがってからあそこはこうした方がなどと考える点がままある。しかし女子部員夜遅くまで居残り、ある時は家にもちかえって一心不乱に原紙を切った。一年はよく仕事をしたと思う。今後部報を出す時には、編集方針を明らかにし、密度の高いものを作ってほしいと思う。

（高木）

随分忙しい一週間であったが、ここにすり上がったものを見ると大変うれしい。

（西村）

とにかく夢中でやった。何とか字がでたようだが、みんなが読めるかまだ心配である。日数が少なかったのでうまく出来なかったが、今後読みやすい良いものを作ってほしい。

（稲葉）

出来上りはあまり感心できるものではないかも知れないが、一生懸命にやった。記念祭までに出来てほっとした。

（中井）

この部誌を編集する仕事に自分も役に立ったことが非常にうれしい。何にせよ、出来てよかった。

（三枝）

発行日
九六四年 十月九日
発行者
杉並区大宮前 三ノ一一八
西校 ワンダーフォーゲル部
編集責任者
高木章子